

パネル②「協定校開拓の現場—過去・現在・未来—」

1980年代から90年代、日本の大学における学生交流は中国・韓国・台湾からの外国人留学生受入が主流であり、反対に日本からは米国等の欧米諸国への海外留学需要が高かった。この状況下で、北米を中心に海外協定校づくりの面で顕著な成果をあげている大学が存在した。米国大学に在籍する学生を対象とした Junior Year Abroad Program を創設し（現在の留学生別科：Asian Studies Program）、その内容は、日本語学習の必修、日本学コースは英語での開講であった。また、同プログラムは、欧米圏の学部生の日本誘致だけに留まらず、同大学へ入学する優秀な日本人学生の確保とその教育の質向上と連動する戦略的取り組みであった。

本パネルでは、その成功事例がどのようにして生み出されてきたか、を振り返りながら、今日にも通じる課題として「協定校開発のあり方」について意見交換をおこなう。

メイン・パネリストの山本氏は、1971年に関西外国語大学の理事長・学長の特命により、国際交流の仕組みの推進役として着任した。当時国際教育交流の分野ではほとんど無名で交流実績がなかった同大学に、新たな挑戦を重ね、受入れ学生の確保と海外派遣が両輪のごとく機能する教育交流システム（今日ほとんどの大学が活用している交換留学モデル）を実現したのである。

2011年3月に退職するまでの40年の間に、当時では最大規模と言える北米から日本へ留学

する学部生全体の 20-30%を受け入れるプログラムを運営してきた。そして、50 カ国、333 大学のネットワークを構築し、年間約 700 人の留学生受け入れ、交換留学生を含め約 1,700 人の学生を海外に派遣する実績をあげた。また、日本初となる交換留学を基軸とした、「2 カ年・2 カ国」の留学、外国の大学と同大学の学位を同時に取得できる「学位留学」も構築してきた。日本の国際教育交流の草創期で、かつ、今日のような教育政策の後押しのない中で、同大学の特性を生かしつつ、戦略的に大学における国際交流プログラムを発展してきたパイオニアである。

本パネルでは、山本氏がこれまで発展させてきた国際教育交流プログラムの根幹とも言える協定校開拓とその戦略に焦点を当ててパネリストと議論して行く。なんのために協定校を開拓するのか？国際教育交流とはなんなのか？これらの課題を念頭に日本の大学における国際教育交流の「これまで」を振り返り、「今」、そして「これから」の方向性を考察していく。

-パネリスト-

山本甫 元関西外国語大学理事・国際交流部長・教授（在職時の役職）

小幡浩司 福井大学 国際地域学部副学部長 教授（元国際教養大学 国際センター長）

坂本友香 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 グローバルラーニングセンター 特任准教授

-モデレーター-

星野晶成 名古屋大学 国際教育交流センター 講師